

EUにおける音楽活動の現状 ～外国人、移民の立場～

2011年7月14日（木） 18:30～20:00
神戸大学大学院国際文化学研究科 A棟4階 中会議室

イタリアで今注目を集める日本

日野原秀彦

日野原秀彦と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

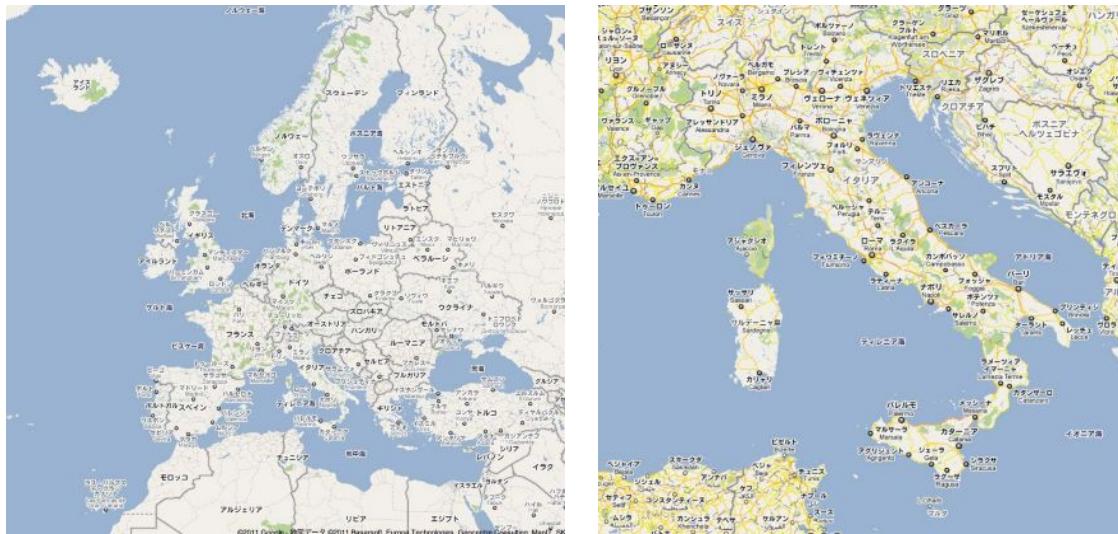
私は、正木さんのような大それたことはお話しできませんので、私自身が一人の外国人として、イタリアの土地で実際どのような体験をしてきたか、イタリアで生活していく上でこんなことがあった、あんなことがあった、というような個人的なことをお話ししようと思います。ですから今からお話しすることを、イタリアではすべてこうであるとか、イタリアでの日本人の状況はこうこうだ、というふうには一般論としては受け止めないでください。日野原秀彦という一個人の、ただの一例としてお聞きいただければ幸いです。

私がイタリアへ行ったのは1987年のことです。今日集まってくれた学生の皆さんには、多分まだ生まれていないか、丁度生まれた頃のことなのではないでしょうか。

実は、私にとってヨーロッパへ留学することは、そんなに重要なことではありませんでした。私が大学を卒業したのは1986年、昭和61年です。つまり昭和の終りの頃の社会だったわけですが、戦後沢山の芸術家たちが留学して欧米の文化を日本に持つて帰ってきて、日本で教育活動にたずさわり、西洋音楽が日本で本格的に成り立ってきたころの社会だと思います。海外のアーティストが頻繁に来日するようになって様々なコンサートが催されるようになったのも、丁度あの頃だと思います。

それ以前は1年に数えるほどしかない特別なイベントだったのが、ほぼ毎月そして毎日（東京の場合ですが）行われるようになったということです。それに依って「本場の」演奏を比較的頻繁に聴くことができるようになった。

私は既に24年ほどイタリアで生活していることになりますが、私が渡伊したころから比べると、最近のイタリアの状況はかなり変わってきていると感じます。詳しいことは追々ご説明しますが、私が大学院の2年生の時イタリアへ留学して、まず最初に住んだのがフィレンツェという街です。地図をお見せしましょう。僕は恥ずかしながら、そのころイタリアが何処に位置する国かも知らない状態でした。非常にぼんやりとしたイメージしか持っていないかったです。ここにいらっしゃっている学生さんたちは、いろいろと研究もなさっていて、そんなことはないと思いますが。



イタリアはヨーロッパの南端に位置しています。

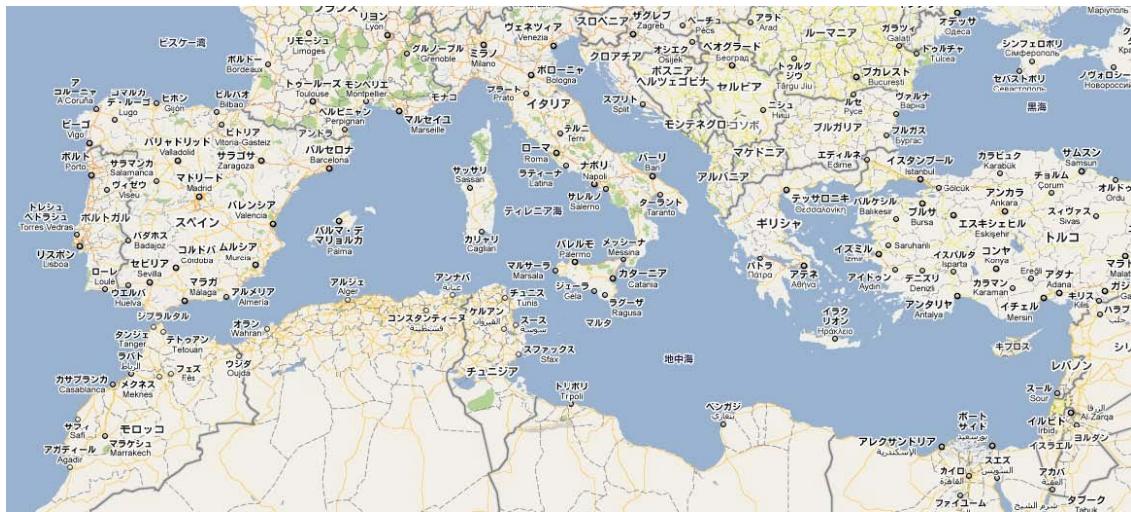
そしてフィレンツェは、イタリアの中部に位置しています。

もっと広範囲の地図をお見せしましょう。ここではインド辺りまで拡がっていますが、ここで距離感というのが、日本人にはなかなか解り難いのではないかと思います。



日本という国は島国なので、日本と外国、日本という島とそれ以外、という感覚を持つてしまう傾向があるのではないかでしょうか？少なくとも僕はそんな風に思って育ってきました。子供の頃は、日本が自分の世界で、それ以外に外国がある、日本人でない人は外国人、外国人は英語を話す。と、そんなイメージを持っていました。

でも、皆さんご存知のように、実際にはそうではありません。

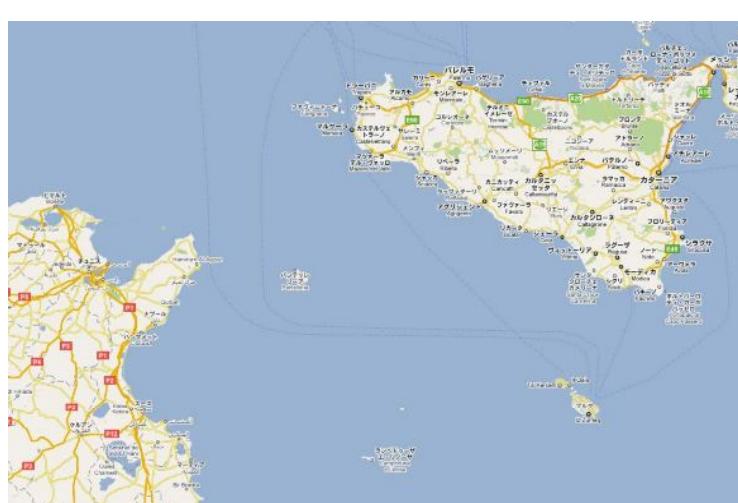


第二次大戦後、アメリカの指導のもとに日本の近代国家造りが行われた。そういう経緯があるため、海外の国々に対してちょっとゆがんだ感覚を持つてしまいがちになるという歴史的な流れを無視することはできませんが、そこから脱却することも必要だと思います。

これは地中海地域を拡大した地図です。真ん中に浮かんでいる二つの大きな島、シシリー島とサルディーニア島はイタリアです。その北にある少し小さめの島、コルシカはフランスです。シシリー島のことは、マフィアなどで有名でしたし、「ゴッドファーザー」の映画とかでも名前を聞いたことがあるのではないでしょうか。この島の南にランペドゥーザという、ちっちゃな島があります。これもイタリア領土です。

それから、東側にギリシャ。そしてその先に、トルコ、シリア、イスラエルと並んでいて、このアフリカ大陸側が最近とても社会情勢が不安定な地域です。

もう一つ気に留めておいて頂きたいのが、僕がイタリアへ留学した1987年には、まだベルリンの壁が存在していたということです。東と西というものが、完全に分割されていた時代で、そのころはまだ、イタリアの北東に位置するクロアチアとか、ボスニアとか、セルビアとかいう全部で六つか七つの国は、まとめてユーゴスラビアという一つの国でした。

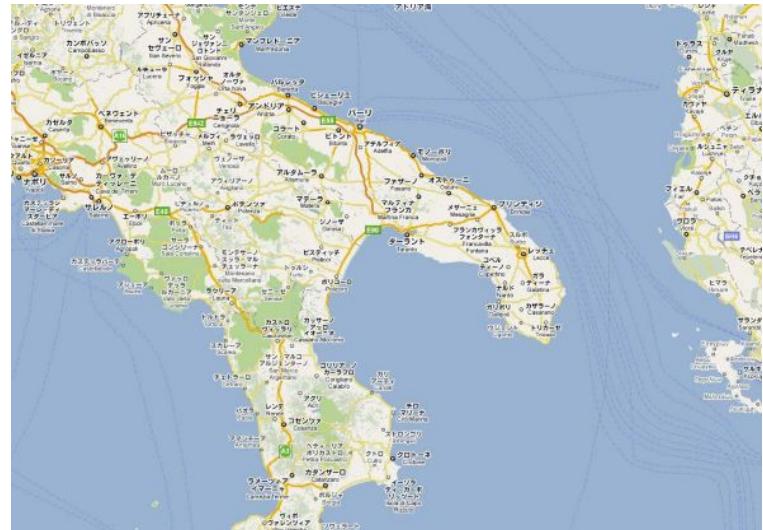


次は南イタリア・シシリー島の地図ですが、よく見て頂くと、さらに南の方に離れて、さっき言ったランペドゥーザという島があります。この島からアフリカまでの距離はとても近くて、イタリアよりむしろアフリカの方に近いんです。アフリカ大陸側にはチュニジアという国があります。

それからイタリア半島の東側の南端の処の地図をお見せしますが、海を隔ててアルバニアという国があります。ここからこの狭い海峡を渡ってイタリアまでの距離も、ほんのちょっとしかありません。日本と韓国よりも近い位ではないでしょうか。

地中海というのは、瀬戸内海に似たようなもので内海です。そのため、とても穏やかな海なんです。太平洋そして日本海とともに波がとても高いですよね。なので泳ぐのにも危険が伴いますが、地中海というのは瀬戸内海の大きいやつが拡がっているわけで、小さなゴムボートで渡ろうと思えば渡ってしまえたりするわけです。ちょっと勇気はいるでしょうが。

こういう距離関係は、難民や移民の動きに關係してくるので、ちょっと時間を掛けてお話ししてみました。



さて、次の地図をご覧下さい。縮尺を同じにして、日本とイタリアを比べてみました。

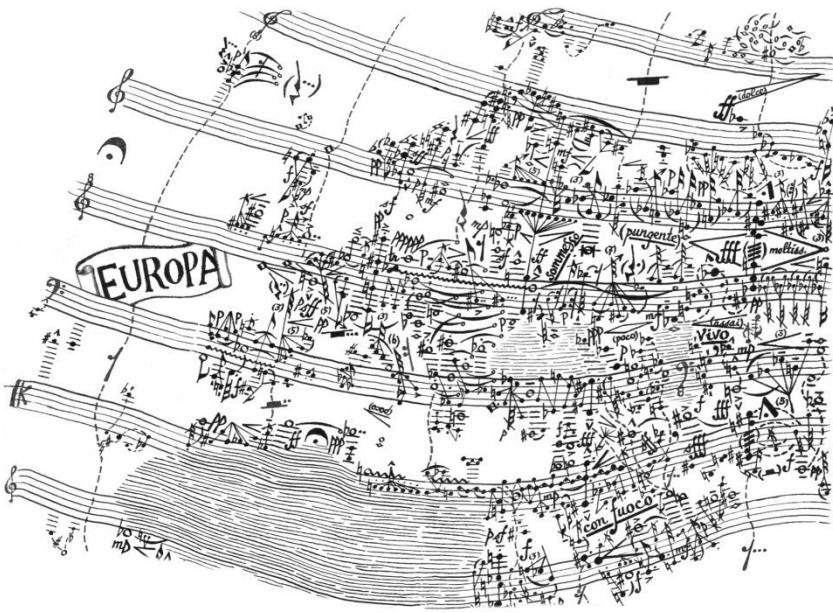
日本と韓国の距離、また日本の大きさに比べて、イタリアとアフリカやアルバニアとの距離を把握していただけると思います。イタリアというのは、日本と地形がとても似ていて、縦長で南北約二千キロ位、面積も大体同じだと思います。気候的にもとても似ています。そして島があります。シシリ一島と九州、サルディーニア島と四国がちょうど対応している感じです。北海道ですが、ぱっと見にはイタリアでは見当たりませんよね。でも実はあるんです。北イタリアにポーラ川というイタリアで一番大きな川が流れていますが、そこで文化圏が変わります。文化圏は地理的な制約があることによって変わったりします。例えば大きな川があって、人間がそこを渡るのに非常に苦労をしないといけない。特に昔は交通機関が発達していませんでしたから、そのため

に文化圏が堰き止められて変わっていく、そんな感じです。それで、このポー川の北側が北海道に対応していると言えるのではないかと私は思います。

これで大体の位置関係を判って頂けたと思います。

余談になりますが、地図繋がりで、一つ私の書いた楽譜をお見せしようと思います。

『世界地図』という作品
なのですが、3枚組になっていて、これはその2枚目
の一部分、ヨーロッパの地図になっている部分です。
この下にアフリカもついていて、この左側の1枚目が
アメリカ、そして右側に3枚目のアジア・オセアニア、
日本のある部分があります。
ご存知のように、日本での世界地図は日本が真ん中に
来ていますが、向こうではヨーロッパが中心に来ています。



図形楽譜というか、絵画楽譜になっていて、ちょっと見え難いですが、この陸になっている部分に音符がぎっしり書いてあって、それを自由に即興的に演奏します。海の部分は休符で、ちっちゃな島になっている音符が時々鳴ったり。実際にコンサートで演奏されたんですよ！皆さん信じられないかもしれませんが・・・

この作品を書いた時は、確かに国籍の観念とか、移民の問題とかのことがとても気に掛かっていたので、こういうアイデアが生まれたのだと思います。

さて、ランペデウーザ島の話に戻りますが、アフリカの政治情勢が悪くなってくると、ランペデウーザ島に難民がゴムボートで避難してくるんです。イタリア領に入ると、イタリア政府には国際協定により難民を保護する義務が発生します。追い返す訳にもいきませんので、臨時の収容所を作ったり、そして難民たちが何とか生活していくように援助をするわけです。

私が1987年にフィレンツェに行ったころ、すでにいくらかの難民はいましたけれど、まだそんなに大変な状況ではありませんでした。その後、ベルリンの壁が壊れて東西ドイツが統一され、アルバニアの政治不安があって、その時難民がイタリアへ流れ込んで来ました。それからアフリカからの難民が、ルアンダの紛争の影響等もあって加速度的に増えて、またユーゴスラビアの内紛があり北かたもどつと難民が避難してきました。イタリアというのは、ヨーロッパの中で、地理的に難民が来やすい位置にあるということかもしれません。そういう状況の中で、どんどんイタリア内での外国人の割合が増えていくことになるわけです。

日本人の感覚だと、日本人じゃないんだから追い返せばいいじゃないか、という世論になってしまふかもしれません。

私は正直なところを云うと、20代の頃、心の奥ではそういう感覚を持っていたのではないかと思います。何故イタリアが自分の国土の中で、他の国の人たちのために苦労をしなければならないのか、ということを不思議に思つたりしました。ただ、そこには歴史的な様々な事情も絡み合

っています。例えば、アフリカ中部の東海岸にあるソマリアという国は、イタリアとは深い繋がりがあります。なぜならソマリアはイタリアの植民地だったからなんです。そのためイタリアには沢山のソマリア人住んでいます。そのような経緯でイタリア人たちは人道的にも感情的にも、義務というより、もっと自然な行動として難民に援助の手を差し伸べているのではないかと思います。

こういう難しい状況の中で、実は私は徳をしたこともあります。

外国人がイタリアに3ヶ月以上滞在するためには、そのための許可、滞在許可証を取得しなければなりません。しかし、あまりに多くの難民がイタリアに押し寄せてきて、許可証を発行する事務処理ができずにパンクしそうになった時期があります。この状況を抜け出すために、ある定められた日（1989年12月31日だったと思います）にイタリア国内に居たことを証明できる外国人には、無条件でこの滞在許可証を発行するという特例を施行したことがあります。滞在理由は自己申告なので、労働のためとか、家族のためとか、何でも審査無く許可されました。事務処理に要する手間ひまを究極まで簡略化して、パンクしそうな状況を開拓するための究極の手段だったわけです。

私は、その時既にイタリアに居りましたから、難民ではありませんでしたけれど、条件に当てはまっていて、留学のためではなく、労働のためにイタリアに滞在する許可を取得しました。普段だったら労働ビザを取得するためには、日本のイタリア大使館に申請をして、様々な審査を通過することが必要なのですが、私はその手間を省くことができてしまったわけです。イタリア人は、事務処理が苦手なのでこんな大雑把な解決方法を見出したりするんです。

イタリアに住み始めた頃のことですが、滞在許可証にまつわるお話をもう一つしたいと思います。

滞在許可証というのは、地方警察に申請するのですが、申請するために窓口に行くと大抵提出する書類が足りません。それで追い返されます。それは、私が忘れたという訳ではなく、そもそも、どんな書類が必要かという説明がもともとはつきりされていないからなんです。何となく、人からの又聞きで何と何が必要らしい、ということ位しか判りません。そして、書類を揃えて二回目の申請に行きます。書類を提出して、それから約二ヶ月待って滞在許可証を受け取りに行く。法律的には、本当は一週間程度で発行されなければいけないのですけれども、事務処理が滞っていることもあるって二ヶ月くらい待たされるわけです。三ヶ月以上滞在する人は持っていないといけない許可証なので、例えば四ヶ月だけ語学研修に行った学生さんなんかは帰国間近になって滞在許可証を受け取ったか、もしくは受け取れなかつたか、という状態です。それに加えて、申請または受け取りに地方警察署に行くと、滞在許可証の窓口にはいつでも長蛇の列がでています。これは1990年代始めに突然難民の数が多くなったことと関係しています。あの頃フィレンツェの地方警察署では、前の日の夜から徹夜で並んでいる人がいましたので、だいたい午前4時頃には列に並ばないと、窓口が正午に閉まるまでには手続きをすることができませんでした。窓口に辿り着けなければ、また出直さないといけません。そういうことを毎年やっていたのですが、本当に嫌でしたね。更新の時期が迫ってくると気が滅入りました。

でも、最近では状況は可也良くなっていて、郵送で申請できるようになったり、窓口は予約制になっていたりしています。

日本に住んでいた頃は考えもしませんでしたけれど、日本でも外国人の方はそれなりに、似たような苦労があるのではないかと思います。今日いらしていただいた皆さんの中にも留学生の方等がいらっしゃるようですので、もしよかつたら後でお話を聞かせて下さい。

日本というのは、とても特殊な社会なのではないかと思います。ほぼ全国民が同じ人種、同じ肌の色をしていて、私の世代位からは政治的にも非常に安定して治安もよい安全な世の中です。そういう社会は実は特殊な状況なのだとということを、イタリアへ行ってひしひしと感じました。

移民の話に戻りますが、世紀が変わる頃になると中国人が次々と移り住んでくるようになりました。香港が中国に返還されたのが、1997年のことです。中国が資本主義的な発展に力を入れるようになってきて、それと共に貧富の差も顕著になり、また国外に出ることも簡単になってきました。そんな社会状況が反映しているわけです。

その影響で、イタリアでは一時期、中華料理店がそちら中にできたことがあります。道角を曲がれば、いつも赤いランプの中華レストランが見当たる、という感じでした。

中華は安いんです。イタリアでは外食をする時、ピザ屋に行ったりトラットリアに行ったりしますが、都市部ではどれだけ安くあげようとしても日本円にして2～3千円（イタリアの物価は日本より少し低めです）はてしまいます。お肉を食べたりしようものなら、もっと高くなってしまいます。特に金欠の学生にとっては、ちょっと無理な金額ですよね。でも中華だともっと安く食べられる。そんなこと也有って、かなり繁盛していました。でもお店の数が多すぎると、当然全部のお店が繁盛できるという訳ではなくなります。そして、ここ5～6年のことでしょうか、中華料理店が日本食を出すようになりました。中華と日本料理と両方だす店もありますし、完全にJapanese Restaurantになってしまったお店もあります。つまり、お寿司・お刺身とか、おそば・うどんとかを中華料理屋で味わえるわけですね。ウェイターも、大半は中国人です。面白いでしょう。

さて、今日私が提案させていただいた講演のテーマは「イタリアで今注目を集める日本」です。注目を集める、と云うと何か尊敬を集めるような、とても肯定的なイメージになってしまいますが、私が言いたかったのは、良いことも悪いことも含めて、近年イタリア人たちが日本に対して、日本という国そしてその文化に対して本当の意味での感心を持ち始めていると感じる、ということです。ブームと呼んでもよいような興味本意の部分はまだ多分にあると思いますし、日本文化の本質を理解したい、という深いところまでは行っていないのでしょうかけれど、以前の東洋全体を十把一絡げにして見ていた頃、サムライがいてハラキリという可笑しな自殺行為の習慣がある国、というような過去と現在が混在した曖昧なとらえ方と比べると、認識の度合いがかなり進歩してきたと言えるのではないでしょうか。

そんなことを感じていてふと思うのですが、イタリアに行く前大学生の頃（1980年代半ばのことです）、私は日本で勉強てきて西洋音楽のことは大体わかった、とか生意気に思っていたわけです。というのも、20世紀に入って、そして特に戦後、多くの音楽家が欧米へ留学して様々な文化経験を日本に持ち帰って、日本国内でもいろいろなことに直接接することができるようになり、それだけで何かわかったような気持ちになってしまいます。ですが、自分の体でどっぷりと浸る機会の無い異文化の全体像をとらえるのは、まず不可能なのではないかと思います。今のイタリア人の日本に対する感心というのは、どこかあの頃、私が西洋音楽に対して感じていた感覚と共通点があるのではないかと思うのです。文化圏が違うということは、当然その根底にある物事や生き方に対しての感じ方に相違があって、微妙なニュアンスとか言い回しとか、その奥深いところまではなかなか理解することはできません。

一つ例をあげてみましょう。先ほどもちょっとお話しした、イタリアで今大人気の日本食ですが、寿司バーとか回転寿しとかも大変繁盛しています。でも、僕はあのお寿司を食べられません。あまりに不味い。わざわざ食べる気分にならない。しかし、日本で美味しいお寿司を味わったこ

とのないイタリア人たちは舌鼓を打って、大喜びで美味しい美味しいと食べる。80年代学生だった私の西洋文化の受止め方というのは、そういう感覚だったのかもしれません。当時の私の西洋音楽の楽しみ方というのは、ちょうどイタリア人がお寿司を味わっているのと同じようなものだったのではないかと思うわけです。

僕が常に気に掛けていることは、異なる文化、そして延いては他人である相手のことを、簡単に解ったつもりにならぬようになります。考え方の違う、文化の違う人とわかり合うということは、そんなに簡単なことではないと思っています。実務的なことは言葉で割と楽にコミュニケーションを取ることができてしまうので、ある種の錯覚に陥りやすのではないでしょうか。一番いい例としてあげられるのが喧嘩をする時かもしれません。イタリア人と喧嘩をすると本当に收拾がつかなくなります。真剣に本音をぶつけ合いはじめた時に、各々の根底にある微妙な感覚の差が出てきて、こちらからも相手からもどうしても説明が出来ない袋小路入ってしまう、という経験を何度もしました。その先を解決するためには、お互いが自分と異なったものを受け入れられるだけの包容力みたいなものを育んでいかないとどうにもならないのでは、と思います。

ちょっと中途半端になってしましましたが、そろそろ時間のようですので、この辺で終りとさせて頂きたいと思います。どうも有難うございました。